

泌尿器科

小児泌尿器科領域全般について診療しています。

特に尿路の先天異常、外性器の奇形といった尿路性器先天異常の形成手術の実績においては、西日本の施設では類をみない数多くの手術を手がけています。

山口孝則科長、鯉川弥須宏医師、此元竜雄医師を含め4名のスタッフによって数多くの尿路性器先天異常の形成手術を施行しており、外来患者数は年間約4000人（うち新患は約800人）、入院患者数は年間約450人を数えています。また手術症例数は年間約350例で、80%が尿路性器形成手術であり、難手術も数多く手がけ、そのうち尿道下裂や乳児期での膀胱尿管逆流症、先天性水腎症といった専門的な技術が必要とされる手術の成功率も高く、同科には県外各地から数多くの患者さんが訪れています。

泌尿器治療の実際

尿道下裂は、通常陰茎の先端にある尿道口が正常な位置より後方にある性分化異常で、少しでも手前に尿道口がある場合から、根元のあたりにある場合までその程度はさまざまです。重症の場合、修復手術は非常に難しく、以前は1回目の手術で曲がっている陰茎を伸ばし、2回目で陰茎の先端に尿道を作っていました。しかし現在では、当科のような小児専門病院では1回で手術をすませるのが主流となっており、その成功率は80%を越えます。手術は1～2才で行い、年間約60例の手術件数があります。

精巣が陰嚢まで降りてこず、鼠径部（足のつけ根）にとどまったり、腹部に残る停留精巣も多い疾患です。生後5、6ヵ月までは自然に降りる可能性があるので待機しますが、できるだけ早期に手術した方が将来不妊になる可能性が低くなると言われており、現在では1才前後で手術をします。

尿路系の異常では、乳児期から尿路感染による発熱をきたす疾患として膀胱尿管逆流症があります。乳児期に発見される重症の場合には将来腎不全になる危険も高く早期手術が必要です。同科では患者さんの約半数が1才未満で手術をし、成功率は99.5%と確立しています。腎盂尿管移行部に狭窄がある先天性水腎症は、最近では胎児診断されており、腹部腫瘍で見つかるような患児では、腎機能が障害される前にできるだけ早期に手術を行っています。

脊髄髄膜瘤などが原因となる二分脊椎の患者さんに対しては

生後早期から尿路管理指導や治療をしており、思春期以降も継続して診療しています。また、一般的に頻度の高い小児包茎や夜尿症・遺尿症などの診断や治療にも積極的に取り組んでいます。

生まれたときに男女の区別がつかない性分化疾患は内分泌学的検査をして社会的な性を決定し、同時に、それに応じた外性器の手術を施行しています。同院には新生児科があり、新生児の外陰部異常、尿路性器異常に関しては即座に協議・連携のシステムがあります。患者さんの発育に伴う精神的ストレスのフォローも怠らないよう心掛けています。小児泌尿器科といっても、対象は小児に限らず、思春期以降や成人になっても尿路性器先天異常で悩んでおられる方々の診療に当たっておりますので、安心して受診して下さい。



Doctor MESSAGE ドクターメッセージ

特にご両親とのコミュニケーションを大切にし、社会的立場も考慮に入れながらよりよい医療を提供することを心がけています。

小児の尿路性器先天異常については専門的な医療技術が必要ですので、病院を選んで受診していただきたいと思います。私どもは患者さんの立場にたった医療を目指しており、その際、各患児の性格や家庭環境、特にご両親とのコミュニケーションを大切にし、社会的立場も考慮に入れながらよりよい医療を提供することを心がけています。

当科を受診するにあたっては、今までの病状や経過、さらに他の医療機関で診療を受けたことがあったり、現在治療中であればすべてありのまま詳しくお話し下さい。またできる限り他の医療機関より転医される場合はその情報（紹介状やX線フィルムなど）をご提示下さい。

また、患児の病気についての不安や疑問は遠慮なくお聞き下さい。特に当科では手術だけに限らず、患児の成長に伴って十分に術後の経過を追うことにしており、将来の不安、遺伝などの問題もできる限りお答えしたいと思っております。



泌尿器科 / 山口 孝則